
首転げの峠

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首転げの峠

【Nコード】

N6016H

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

ある所に、首転げと呼ばれる峠があった。そこには昔から、頭だけが転がり落ちてくるといって、言い伝えがあつて……。

ある山中に、首転げという峠があったそうな。

その峠、急な勾配に剥き出しの岩肌が続くという難所。

昔から老人が1人で登ろうものなら、苔で足を滑らせ、転げ落ちてくる間に頭だけとなって戻ってくると言われていた。

近隣に住んでいる村人達も余程のことがない限り利用せず、既に荒れ果てた獣道とさえ見分けが付かなくなっていた。

ある酒屋で噂をつまみに、二人の男が献を酌み交わしていた。

始めは真つ当な色恋沙汰から、近所の夫婦が誰と懇ろしているのかという下世話な話題。

やがて話の種が尽きかけたのか、どちらからともなく近頃耳にする怪談話を口にし始めたのである。

「それで、どんな与太話だったかな」

「おいおい、まだ宵の口だってのに、もう惚けちゃったのか。例の峠で本当に出たって話だろ、首転げが」

「誰の頭が落ちてきたっていうのかい？ どうせ酔っ払いの見間違いだろ」

「いやいや、どうやら見つけた村長が悪い噂が立たないように、とつと埋めちまったらしいんだ。その姿を、隣村の奴が見たらしい」

「らしい、らしい、嫁にくるらしい、ってか」

「ああ、違えねえ。彼奴に聞かせてやりたいねえ」

二人が笑っていた所、今まで聞き耳を立ててた男が背後から近寄った。

名を五平という。

この辺りでは、ちょっと知られた暴れ者だった。

身の丈が6尺、腕は丸太のように太く、内蔵がひっくり返ったよう

な面をしている。

五平は、少し知恵が遅れている事を大層気にしており、少しでも陰口を叩いた男がいれば、其奴を簀巻きにふんじばり、その隣で嫁を手籠めにするような男だった。

また、破落戸共がやっている賭場でも初めの内は大人しいのだが、負けが積もると全ての畳をひっくり返し柱を引き抜く暴れ出す。

面子が潰されては堪らないと破落戸者も刃物を持ち出すが、五平の迫力に恐れ戦き、てめえの女が犯されてる姿を黙々と見ているしかなかったのだとか。

その上、村長の一人息子というのだから、もう誰も逆らう事が出来なくなっていた。

「おい、おめえ等」

五平は、ぶすつとした顔で二人の対面に座る。

そして赤子の頭でも握りつぶせそうな大きな手で徳利を持ち上げると、一口で酒を飲み干してしまったのであった。

「ふー、うめえ。時におめえ等、その首転げの話は本当か？」

「へえ」

勝手に酒を飲まれたというのに、二人は顔を青ざめ頷いていた。

「それじゃあ、俺の親父が埋めた頭は、何処にあるんだ？」

「……さあ、そりや存知ねえです。私も小耳に挟んだ程度の事ですから」

「その見たつてのは誰だ？」

「すいやせん、そっちの方もとんと」

「なんだか、はつきりしねえ話だな。それなのにおめえ等、噂話に花を咲かせてたつてのか」

そう五平が鬼瓦のように顔を一層に歪ませるので、二人は更に萎縮してしまった。

このままでは癪癪を起こし、店の中で暴れそうだと思った亭主が、暖簾をかき分け奥から出てきた。

「すいません、五平さん。今日の所はこれで」

五平は小銭を袖の下から渡され、少し気分を良くしたのか、店先に置いてあつた酒壺を一つ担ぐと、大笑いで店を後にしたのだった。残された三人は、その後ろ姿を神妙な顔で眺めていた。

五平には、お鵜と言う嫁がいた。

美しく気だても良く、旦那が帰宅すれば草鞋を脱ぎ捨て、土の上に座つて出迎える心遣いの出来る女だった。

当然、こんな出来た嫁が荒くれ者の五平に嫁ぐなんて事はありません。無い話で、旅の道すがら、一人で歩いてきたお鵜を搔つ攫い、何日もかけて手籠めにしてしまったのだとか。

しかも逃げ出さないよう足の健まで焼き切ってしまったという念の入れようだった。

「おう、けえったぞ」

「はい、お帰りなさいませ」

お鵜が正座から頭を下げて出迎えるのを、五平はにやけた面で眺めた。

「漸く、しっくり気やがって。どこぞで、新しい間男でも引つかけてきたのか？」

「ご無体を。この様な体では、出歩くこともできません」

「おうおう、そうだったな。だが、男を愛するには、それでも事が足りる。どれ、ちよつと確認してやろう」

「ああ、今日はホトが冷えております。どうか後生ですから、加減してください」

「ウルセエ」

五平は正座していたお鵜の首根っこを掴むと、犬猫のように持ち上げて藁の寢床に引き込んだのであった。

何度か果てた後、五平はしつとりと汗をかいて抱きついてお鵜の顔を持ち上げた。

「もう少しで、てめえもそんな気が無くなるだろうよ」

「そんな気、ですか？」

「惚けやがつて。俺が間男の存在に気が付いて無いと、本当に思つてやがるのか？ 夜な夜な、男が尋ねてきてるだろうが。俺は知恵が足りないかもしれんが、愚鈍な馬鹿じゃねえぞ。だが、親父に首転げの話をして、金をせしめてきてやるからよ。そうすりゃ生活も楽になる」

「……お待ち下さい。首転げと言えば、あの怪しげなお話じゃありませんか。お止しになってください、祟られてしまいます」

「うるせえ、情けなんかかけるんじゃねえ。男が一度口にした事を飲み込めるかってんだ。それに、おめえ程の女を手放して堪るかよ」

その晩、お鵜は朝日が昇る頃になって、やっと眠りにつけたのだった。

次の日、五平は村の一番高い所に立っている村長の小屋を訪れていた。

首転げで親父の姿を見た奴がいると、黙って欲しければ金を出せと脅迫しに行ったのである。

だが、今までだって働きもせず飲んで打つての繰り返し、金が無くなればこうやって顔を出してきた息子に小銭を包んできたのである。

村長は、もう金が無いと突っぱねた。

「よいか、考えても見る。お前を捕縛されないため、幾ら役人に積み上げていると思つておる」

「それじゃあ、バラされても良いつてんだな？」

「ああ、構わん。だいたい、ワシがやったという証拠がない」

「証拠か、面白い。見つけてやろうじゃねーか」

五平が慌てて小屋を飛び出そうとしているので、父親は怒鳴り声を上げた。

「こんな時刻から山登りか！ 与太話じゃないなら首転げが出るのは丑三つ時だろうが、この大馬鹿野郎！ とつとと出て行け！」

五平は夜まで酒を飲んで待つてから、首転げがある峠に向かっていた。

月も黒い雲で隠れてしまい、肅々たる風の音だけが耳に届いていた。夜目が利く五平でも、手に持つている提灯の光が無ければ忽ち足を滑らせ、村本まで転げ落ちてしまうだろう。

草履の裏側にヌルリとした苔の感触が伝わるので、この所雨は降っていないのにな、と少しだけ訝しんだ。

五平は山男にも負けない早さで歩み、日が昇る前に頂きに辿り着いたのだった。

だが、そこは岩肌しかない、有り触れた山頂であつた。

「糞、何もありやしねえ」

何か証拠をでっち上げられるような物でもあればと来たのだが、辺りに転がっているのは鹿の糞と雑草ばかり。

これでは草臥れ儲けというものだが、ここで惚けていても仕方ない。五平はゆっくりと踵を返した。

その時である。

提灯の明かりが掻き消えたのは。

獣の皮を被つた何者かに、水をかけられたのは。

「誰だ、お前っ！」

五平は追いかけようとするも、足下の苔が一層とぬるぬるしており、立っているのがやつとであつた。

そうこうしている内に、あの人影は何処かに消えてしまったのだった。

五平は禍々しい鬼のように顔を歪めていた。

ここが往来であるのなら、彼奴を逃がさずに殺してやった。

だが、こんな足場の悪い所では歩くのすらままならない。

胃の中で燃え上がる怒りを噛み殺し、五平は這い蹲るように山を下ったのだった。

幾ら強靱の肉体を持っているとはいえ、目の前すら見えない闇夜に首転げを歩くのは危険だったのだ。

下山中、着ていた服は泥や草だらけになり、袂には小さな糞が幾つも入っていた。

やつとこさ村にたどり着いたと思った五平ではあったが、否やその瞬間足が止まる。

出迎えたのは幾重にも連なる篝火。

夜に輝く鬼火を手に村人達が待ちかまえていたのだ。

まるで祭りのような光景にも見えるが、唯一違うのは集まっている村人達が鍬や斧を持っている事だった。

五平が呆然としている中、誰からともなく襲いかかったのである。幾ら腕っ節が強いとはいえ、寝ずにしこたま女を抱いた後、這うように山を上り下りして疲れていた。

その上、村中の人間に囲まれたのでは、五平と言えども一溜まりもなかった。

何人かを返り討ちに出来たのだが、最後は背後から竹槍でやられ、死に絶えてしまったのである。

事が終わり、静まりかえった現場で酒屋の亭主が口を開いた。

「ったく、手間をかけやがって。予定じゃ、こっちに死人は出ない筈だったのに。噂を聞かせたりとか、色々仕組んだ意味が消えちまったわ」

「まあ、仕方あるまい。その分、金は積む。五平を殺すのに、これだけの被害で済んだのだから御の字だろう」

五平の父である村長が答えた。

その背後から、肩を担がれたお鵜が鉈を持って近づいた。

「村長、それじゃ約束通り、首を切り落とすのは私の役目だよ」

「……無論。ただお鵜よ、呉々も此方の約束も忘れないで欲しい」

「ああ、分かってるよ。お腹の子が生まれたら村長に渡すよ。そ

したら私はこの村に近づかないさ」

「それなら良い。さあ、皆も手を貸してやってくれ。私の孫に何かあったら大変だ」

その後、ある怪談話が再び広まった。

それは首転げの峠から、本当に頭が転がってきたのを旅の住職が見つけたらしく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6016h/>

首転げの峠

2010年10月28日08時20分発行